



書評

[評者]

内海 桃絵

大阪大学大学院准教授・総合ヘルスプロモーション科学

医療者のための

成功するメンタリングガイド

徳田 安春 監訳

●A5 頁160 2020年12月

定価：本体2,500円＋税

[ISBN978-4-260-04311-3] 医学書院刊



メンタリングに興味はあるけれど、日本の医療文化になじまないのではないかと、異動も多いのに長期的な関係をどう築けばよいのか……そんな疑問を持っていた方々に待望のメンタリングガイドが出版された。メンタリングは、プロフェッショナルリズムの育成、安全文化の醸成に効果がある。これまでの実践を踏襲しただけでは対処が難しい状況が発生している今こそ、手に取っていただきたい一冊である。

本書は全10章の三部構成となっており、最初の3章は「メンターへ」、次の4章は「メンティーへ」、そして最後の3章は「メンター&メンティーへ」と題し、それぞれの役割の心構え、担うべきこと、気を付けるべきことなどが、読みやすい文章で書かれている。

まず驚いたのが、チームメンターシップがスタンダードだと述べている点である。それにより、メンティーはより幅広い視野を持つようになり、メンター1人当たりの作業負荷が減る。そして、チームを組むことがメンティー、メンター双方にとってのセーフティ・ネットになるとしている。責任を抱えすぎて消耗しているメンターには朗報である。

また、ぜひ読んでいただきたいのは、「メンティーへ」の章である。大きな口を開けていればメンターが親鳥のように餌を与えてくれると勘違いしているひな鳥メンティー

がいる。しかし、本書では「メンタリングでは、メンターが主な責任を負うと思う人もいるかもしれないが、実際はまったく違う」、「リーダーシップの良し悪しは、ついていく人の姿勢にかかっている」と指摘している。そして、「良い関係のためには、自分も全力を尽くす必要がある」と述べ、具体的に何をすればよいのかが書かれている。

さらに、世代を超えたメンタリングの章ではミレニアル世代に焦点を当て、その特徴を解説しているのが興味深かった。監訳の徳田安春先生はじめ訳者の先生方のコラムも面白い。反面教師のような上司のことやメンター・メンティーの基礎となっている先輩研修医からの言葉など、先生方のメンタリング経験談を楽しめる。これからメンタリングを実践する私たちの背中を押してくれるようなページになっている。

そして最後に、本書には豪華な付録が付いている。なんと関連文献38件が注釈付きで掲載されているのだ。「メンターが犯しがちな12の誤り」や「メンティーがメンタリング関係から最大限の利益を得るための7つの方法」、「メンターシップにおいて陥りやすい5つの誤り」などがまとめられている。折々で見返し、自身のメンター、メンティーとしての在り方を振り返るのに役立つだろう。新人、中堅、エキスパート、管理者など立場にかかわらず医療にかかわるすべての人に必読の書である。